

# 市橋文庫蔵『弥生日記』訳注（五）

## 愛知県立大学稀書の会

本学学術情報センター市橋文庫には、岡崎の俳人鶴田卓池と刈谷の俳人中島秋拳が編纂した『弥生日記』の刊本を蔵する。稀書の会では、地域の文化及び文化交流史の考究・紹介を目的として、本学が豊富に蔵する古俳書資料のうちから、この『弥生日記』を選び、その読解に取り組んでいる。今年度の紀要原稿は、卓池・秋拳の弟子たちの来訪とその携えてきた発句を記述した箇所をとりあげた。伊藤伸江が担当した句を、輪読による討議を経て、年報用に成稿した。

### 【凡例】

- 一、底本は文政七年五月名古屋久兵衛版『弥生日記』愛知県立大学学術情報センター市橋文庫蔵（OIII・142）本である。
- 一、翻字本文は、文政七年版を忠実に翻刻した。本文掲出にあたっては、【翻刻】に本稿で扱う箇所を一括掲出し、【本文】に、次項に記すような改訂を加え作成した本文を記し、【注釈】部分には、注釈の便を考慮して適宜分割した形でとりあげた。

- 一、注釈本文は、読解の便をはかるため、底本を歴史的仮名遣い表記に改め、必要に応じて濁点を付し、句読点、送り仮名を補った。翻字本文を適宜参照されたい。原文の表記の誤りかと考えられる箇所は改め、あて字、異体字、送り

り仮名は標準的な表記に直して示した。漢字表記が自然である語句に関しては、全体の統一を考えて漢字に直し、難読語句には、校注者が（ ）書きで振り仮名を付し、踊り字はすべて開いた。

一、注釈本文の各句には、便宜上、校注者による通し番号を付し、前句を添えた。

一、訳注においては、【本文】、【季・季語】、【作者】、【語釈】、【現代語訳】の項目を設け、必要な場合には【考察】の項目も設けた。

一、【語釈】にあげた和歌、連歌、俳諧などの引用は、後述引用文献に依る。読解に有効と考えられる場合には、先例のみならず後代の作品も例示する場合がある。引用にあたっては私に濁点を付し、片仮名など読解に不便な文字は必要に応じ平仮名に改めた。

### 【翻刻】

#### 蘭所游覧より消息

あたりには人影もなし花に鏝

霞石

帆祝ひの酒くみこほす春日かな

游覧

雛の客ひ、なほと来て並ひけり

欽哉

年々や花の老木の出来ふ出来

北泉

春の雨朝湯しらせてきたりけり

蘭所

七日の日はあるしのかたに仏事

ありてもの毎そ、ろなりければ

此日は花園山の花にうそふき

あたり近き寺院の花にあそひくらしぬ

十日

巢李吉田の人々を伴ひ来たる

途中の吟

青木川

はるの鴈たてはかへると思ひけり

真福寺

人について鴉も来しや花の奥

【本文】

蘭所游覧より消息

あたりには人影もなし花に(やうり)鏝

帆祝ひの酒くみこぼす春日かな

雛の客ひ、なほど来て並びけり

年々や花の老木の出来不出来

春の雨朝湯しらせてきたりけり

七日の日は、あるじのかたに仏事

ありて、もの毎(ごと)そぞろなりければ、

此日は花園山の花にうそぶき、

あたり近き寺院の花にあそびぐらしぬ。

十日

巢李、吉田の人々を伴ひ来たる

三岳

石菜

霞石

游覧

欽哉

北泉

蘭所

途中の吟

青木川

春の鴈立てば帰ると思ひけり

三岳

真福寺

人について鴉も来しや花の奥

石菜

【注釈】

蘭所游覧いづみより消息

●蘭所：足助在住の俳人。天明六年1789～元治元年1864。足助田町・油屋小出権右衛門。卓池の『諸国人名録』B本には「蘭所 同（稿者注「足助」をさす）田町 小出才兵衛」とある。

●游覧いづみ：足助・宮川与二右衛門（足助陣屋の武士）。足助陣屋は、旗本本多氏の陣屋。卓池の『諸国人名録』B本には「游覧 同（稿者注「足助田町」をさす）宮川与市右エ門」とある。

【現代語訳】蘭所・游覧より手紙（がある）。

【考察】板倉塞馬が、今回取り上げた『弥生日記』の、直前の箇所に出ている。このあたりは足助俳人グループからの来訪、手紙とその中に書いてある句となっている。足助には大庄屋小出家があり、お茶や俳諧などの文化活動を行っていた。例えば、嘉永六年正月の「三河国加茂郡囲碁見立番付」では、行司が足助の宮川游覧いづみであり、東の前頭に足助の一庵塞馬、小出権右衛門（蘭所）が見え、囲碁も盛んであったことがわかる（『愛知県史 資料編20学芸』（平成24）所収資料831）。小出家は、こうした文化活動のために書籍の購入をしたり、作品の出版を計画したりしており、名古屋から永楽屋東四郎などの書肆が足助に向いて営業している。

足助俳人たちと卓池、秋拳は関係が非常に深く、秋拳はしばしば、塞馬と蘭所に書簡を送っているし（『板倉塞馬全集』、

秋拳は足助社中の俳人と旅行も多くしている。卓池も多く足助を訪れ、秋拳と共に塞馬の元に滞在した。

あたりには人影もなし花に鐘(や)

霞石

【季・季語】春（花）

【作者】霞石かぎ：足助・鷹見氏。蘭所、游鳧、霞石らは、中島秋拳の弟子。例えば文化十一年十一月十九日には、秋拳を迎え、彼らを含め七人で歌仙「川音に」（発句「川音に声はまぎれぬ千鳥哉」秋拳）を巻いている。

【語釈】●あたりには：周辺には。「あたりにはない風を見る柳哉」（涓江話・柳・桃国・943）。●人影もなし：人の姿も見えない。周囲が静かで穏やかなことを表す。「今朝の若菜人影もなし野は入り日」（杉風句集・422）。●鐘：細長い剣を長柄の先端につけて突き出す武器。『毛吹草』には「一連歌に不云出物、俳諧之一座に只一也。但品替りては又有べし。其類少々、：鐘一やり梅・やりかん等之内に又」とある。『俳諧類船集』には、「鐘 梅、：鉦、戸、番所：」とある。白梅の一品種「鐘梅」を詠む句はよく見られるが、花に配するのは珍しい。足助には旗本本多氏の陣屋があり、鐘持ちの姿も多く見られたかもしれない。眼前の景を素直に詠んだか。

【現代語訳】あたりは静かで人の姿も見えない。美しく咲く桜の花に鐘だけが置いてあつて。

帆祝ひの酒くみこぼす春日かな

游鳧

【季・季語】春（春日）

【作者】游鳧

【語釈】●帆祝ひ：旅立ちの祝いをさすか。「帆祝ひやかならず事ことに夕しぐれ」（きらく集・冬428・塞馬）。『きらく集』

は塞馬の自撰自句集で、文久三年1863頃の作成かとされている（深津三郎氏作成の塞馬年譜（『続板倉塞馬全集』）による）。後に塞馬も詠む句例があることから、足助ではよく使われた語か。●くみこぼす…水などを汲んであふれさせる。「鞠箱のうへ露ぞをくなる／ぬれえんに汲こぼしけり鉢の水」（信徳十百韻・364／365）。「門井戸の泉涼しう汲こぼし／晦日あらたに白き幣」（七柏集・1887／1888）。

【現代語訳】旅立ちの祝宴の酒をおしげもなくみなみと汲んで溢れさせている、このうららかな春の一日であることだ。

雛の客ひゝなほど来て並びけり

欽哉

【季・季語】春（雛）

【作者】欽哉…？文久三年1863。足助新町・藤井宗十郎。「同（稿者注 足助）新町 藤井宗十郎」（『諸国人名録』B本）。文政から嘉永年間にかけて足助俳諧資料に多く登場する。

【語釈】●雛の客…三月三日に雛飾りを見に来た客。「喰くもので釣つて遊ぶやひなの客」（続有磯海・三月三日・范孚）。

●雛ひひな…雛人形。雛飾り。俳諧に雛の句は多い。「鬼の子に餅もちを居するもひひみなかな」（炭俵・みの如行・279）。「黛のはげめでたき雛かな」（青々処句集・78）。「風呂敷につつむ山家の雛ひひなかな」（塞馬自句書留（弘化三年）、「見かけには似ぬ雛もあり木賃宿」「雛立てやれ壁かくす山家かな」（塞馬自句書留（嘉永三年）など）。

【現代語訳】雛飾りを見にきた客が、ちょうど雛の人数くらいやってきて、にぎやかに並んでいることだよ。

年々や花の老木の出来不出来

北泉

【季・季語】春（花）

【作者】北泉：足助・山田泰淳（『諸国人名録』B本）。文政年間に刊行された一枚刷に「草臥やわるい宿とる山の雪」という句が見え、卓池刊の『すぎぞめ集』三つ物に「陽炎に大きなのかかりけり」という句がある（『板倉塞馬全集』）。

【語釈】●年々：毎年毎年。「年々に花の見やうのかはりけり」（枇杷園句集・木母寺・61）。「年どしや梅に眼ばる角大師」（花鳥楽・塞馬）。●花の老木：長年立ち、年輪を重ねた桜の木。「故郷や花の老木にしらるらん」（雲玉和歌集（松平文庫本）・秀逸体・4）。●出来不出来：仕上がり具合の良し悪し。「見わたせば出来不出来あるかがし哉」（其袋・案山子・呂洞・562）。

【現代語訳】毎年ごとの状態によってなのかなあ。桜の老木は花が見事に咲く年とそうでない年があることだ。

春の雨朝湯しらせてきたりけり

蘭所

【季・季語】春（春の雨）

【作者】蘭所

【語釈】●春の雨：春雨。静かに降り、植物の芽吹きや桜の開花をうながす。「く又木の芽春雨打そそぐ比には、今幾日ありてか咲出るをも見んと待つ折しも、やうやう梢の杳に色めくを見ては一花開くれば天下の春とぞしり、く明ぼの、空かき曇り雨そぼふるに、濡々ともおなじくば花の蔭にやどらん事を思ひ、く」（『至宝抄』）。「竹馬のあとふりけしぬ春の雨」（青々処句集・春・43）。「居風呂に眩<sup>かひな</sup>うかしてはるの雨」（鳳朗発句集・春雨・71）。●朝湯：朝にわかす風呂。朝風呂。前項の参考句のように、春の雨と居風呂<sup>すえ</sup>の入浴を合わせた句が、卓池同様、天保時代に評価の高い鳳朗に見られることは注目される。この蘭所の句も、煙るように降る春雨と、明るい朝に、湯気ののぼる朝湯のイメージとを重ね合わせて詠んだものか。「朝湯から春の匂ひやきそ始」（鶉は羽に（寛保四年歳旦帳より）・条風・7）。「一はづみするも朝湯と新酒哉」（志多良・一瓢・585）。

【現代語訳】春雨が降る今日、ちょうど朝湯がわいたと知らせてきたことだよ。

七日の日はあるじのかたに仏事ありて、もの毎(毎)そぞろなりければ、此日は花園山の花にうそぶき、あたり近き寺院の花にあそびくらしぬ。

【語釈】●あるじ…卓池・秋拳を滞在させてくれている弟子筋の人間。詳細は不明。●うそぶく…詩歌を口ずさむ。

【現代語訳】(三月) 七日の日は、主人の方で仏事があつて、何につけてもいろいろと騒がしいので、この日は、花園山の花をながめて詩歌を口ずさみ、この近辺の寺院の花を見て終日楽しみ暮らした。

十日

巢李、吉田の人々を伴ひ来たる

途中の吟

【語釈】●巢李…「田町 松岡幸吉」(『諸国人名録』B本)。田町は現在の愛知県岡崎市田町であろう。岡崎城西方の岡崎市中心部にある。●吉田…現在の豊橋市の旧称。吉田宿から岡崎宿へは、東海道を通ると、吉田く御油く赤坂く藤川く岡崎と進むことになる。

【現代語訳】(三月) 十日 巢李が、吉田の人々を伴って来る。その途中での句。

青木川

はるの鴈立てば帰ると思ひけり 三岳

【季・季語】春（春の鴈）

【作者】三岳：「吉田下り町 鈴木与兵衛」（『諸国人名録』B本）。寛政四年1792～安政元年1854。通称鈴木屋与兵衛。権廻屋と号した。卓池の門人で吉田（豊橋）の人。渡辺華山に俳画を学んでいる。『青々処句集』には、三岳亭での句が見える。

【語釈】●青木川：岡崎市北部を東西に横切り、矢作川に流れ込む川。元々は伊賀川を通り、矢作川に流れ込む川であったが、正保年間から元禄年間にかけて直接矢作川に流れこむように付け替えられた。●春の鴈：春に北へと飛び立っていく雁。「春の鴈立さはぎては日をおくる」（青羅発句集・春雁・105）。

【現代語訳】青木川にて

春に青木川にいる雁を見ると、飛び立てば、ああ北へ帰るのだとすぐに思うことだなあ。

### 真福寺

人について鴉も来しや花の奥

石菜

【季・季語】春（花）

【作者】石菜：鈴木友吉。御油の俳人。「御油 巴や長右工門」（『諸国人名録』B本）。

【語釈】●真福寺：霊鷲山降劍院真福寺。現在も岡崎市真福寺町薬師山六にある天台宗寺院。本尊は薬師如来。聖徳太子の建立をうたう古寺である。花園山は真福寺の北東に位置する。南方から青木川を越え、真福寺を過ぎて花園山に至ることになる。●鴉：カラス。「里の子や鴉も混じる花御堂」（一茶発句集・1537）。

【現代語訳】真福寺にて

私たちはこの真福寺の北にある、師のおられる花園山へとはるばるやってきたのだが、人の後について鴉もまたやってきたのだろうか、この花の咲く寺の奥に（鴉がまるで一緒に来ているかのように姿を見せていることよ）。

【引用・参考文献】

- 和歌・俳諧の引用は新編国歌大観、新編私家集大成、古典俳文学大系のCD-ROMによる。
- 岩波文庫『連歌論集下』（1956・岩波書店）
- 新日本古典文学大系『芭蕉七部集』（1990・岩波書店）
- 大磯義雄『青々卓池と三河俳壇』（名著出版・1989）
- 岸野俊彦「近世名古屋書肆の営業展開」〔名古屋芸術大学研究紀要〕33巻・2012。
- 深津三郎編『板倉塞馬全集』（平成一五・犬塚謄写堂）
- 同 『続板倉塞馬全集』（平成二四・犬塚謄写堂）
- 谷澤靖・永田友市『西三河の俳人 中島秋拳』（昭和五七・西村書房）
- 『愛知県史 資料編20 近世6学芸』（平成二四）
- 大磯義雄『俳人鶴田卓池』（昭和六一・本阿弥書店）

平成二十九年度『弥生日記』実地踏査

【踏査日時】

平成二十九年九月十八日（月） 午前九時～午後五時

伊藤伸江

## 【踏査内容】

テーマ・旅する俳人たち

県大所蔵古俳書『弥生日記』ゆかりの俳人の資料を拝見し、彼らの歩いた道を実際にめぐり、また図書館での展示、研究会用に資料写真を撮影する。

具体的には、現在も残る三河の東海道・姫街道に関し、駿河国から三河国へと向かう道の一部を実地に歩き、歌枕をめだた芭蕉ら俳人の旅を体感する。また、『弥生日記』作者に挨拶すべく花園山に参じた東三河の弟子たちの地理上の歩みを理解する。岡崎市立中央図書館にて、鶴田卓池文庫の古典籍（卓池作紀行文など）を拝見する。

## 【目的地とスケジュール】

①名鉄東岡崎駅集合↓名電赤坂駅



②赤坂駅↓大橋屋（旅籠）、浄泉寺（広重絵のソテツ移植）、関川神社（大楠、芭蕉塚「夏の月御油からいでて赤坂や」）  
（9時30分～10時15分）



③宮路山を右手に眺めつつ、御油の松並木↓高札場跡↓ベルツ妻花の実家跡↓松並木資料館  
（10時15分～11時00分）



④旧御油橋↓姫街道追分↓芭蕉塚「紅梅や見ぬ恋つくる玉すだれ」（国府観音）↓国府駅↓東岡崎駅  
（11時00分～13時00分）



⑤ 鶴田卓池本宅跡（岡崎信用金庫本店） および満性寺（卓池墓及び句碑「かがやきの増すばかりなり今日の月」あり）  
 を見つつ図書館方面へ（途中昼食）



⑥ 岡崎市立中央図書館

鶴田卓池文庫を図書館司書都築さんの立会いのもと閲覧、資料拝見

稀書の会の図書館展示にお借りする資料についてご相談

（14時30分～15時40分）



⑦ 真福寺（岡崎市真福寺町葉師山6）

境内散策の後、解散

（16時20分～17時00分）

【参加者】

教員 伊藤仲江

院卒生・学生

山本智穂、狩野一三、加藤希、香村彩、坂侑香理、権田かえで、杉沢花綾、脇田透子、田中裕衣